尾張元興寺跡

第18次発掘調査報告書

2019

名古屋市教育委員会

例　言

1　本書は、名古屋市中区正木四丁目から熱田区新尾頭一丁目にかけて所在する尾張元興寺跡の第18次発掘調査報告書である。

2　調査地点は、名古屋市熱田区新尾頭一丁目206番の土地に計画された事務所ビル建設予定地である。〔尾張元興寺跡の遺跡範囲は、「佐屋街道」の南側で今回の調査地点の東側の土地で行われた第16次調査地点（平成28年ナカシャクリエイテブ株式会社調査）の成果などから、遺跡範囲の南側はさらに遺跡が残存していると判断され、平成30年6月15日付で弥生、古墳時代の集落跡として「新尾頭1丁目遺跡」が愛知県埋蔵文化財包蔵地台帳に新規記載された。

今回の工事計画の届出（文化財保護法第93条）は、平成29年8月7日付で提出されていて、今回の調査位置は、「尾張元興寺跡」の南西端にあたるが、新規登録された「新尾頭一丁目遺跡」の北西部にも該当する。ただし、本報告書の遺跡の記載は届出時点での「尾張元興寺跡」として使用している。〕

3　発掘調査期間、面積等は、以下のとおりである。

発掘調査期間　　平成30年9月20日から同年10月31日まで

発掘調査面積　　約97㎡

発掘調査の原因　事務所ビルの建設

調査担当者　　発掘調査に至る調整事務は、教育委員会文化財保護室学芸員水野裕之が、発掘調査は、水野と同学芸員片桐妃奈子が担当した。

4　調査の実施にあたり、事業者である株式会社杉本組からは発掘調査費用をはじめ、工事フェンスの設置、舗装および表土層の除去等、現場作業において多くの提供、協力を得た。

5　本書の編集、執筆は、片桐妃奈子のほか、村木望子、高田由紀の協力を得て水野が担当した。

凡　例

1　記録した図面の標高は、東京湾平均海面（TP）である。

2　遺構の座標は、世界測地系Ⅶ系を使用している。

目　次

1　遺跡の位置と環境

2　経過

3　調査の方法と成果

(1)　調査の方法

(2)　層序

(3)　調査の成果

1）遺構・遺物の概要

2）遺構と遺物

4　まとめ

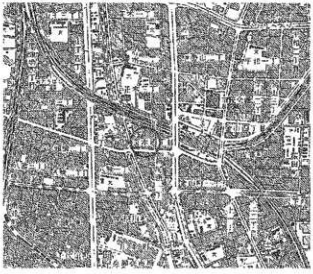


図1　遺跡位置図（1/2.5万）

1　遺跡の位置と環境

尾張元興寺跡は、名古屋市内の中央部を南北に細長く 7.5km ほど連なる標高 10m 前後の更新世台地（熟田台地）の西端部に立地している。この台地の北縁部には、戦国期に那古野城が築かれ、近世には名古屋城が徳川家康により造られた。また、南端部には、熱田神宮（熱田社）が古代より鎮座し、その北側には、断夫山古墳など比較的大型の古墳が数基存在する。それぞれ名古屋市西方に広がる沖積平野（濃尾平野）や内湾を眺望する位置を占めている。縄文時代以降の遺跡が台地西側に連なるように分布するなかで、当遺跡は、この台地のほぼ中央部に位置する遺跡である。

尾張元興寺跡は、7 世紀中頃に建てられた古代寺院（願興寺）のあった場所の遺跡であるが、当遺跡の北側 500 m には伊勢山中学校遺跡、その北には正木町遺跡があり、それぞれ古墳時代から古代、中世にかけての遺跡がある。両遺跡は、南北に連続しており、その南に台地を東西に切り通した鉄道が通っているが、古墳時代の集落跡としてみると尾張元興寺跡および新尾頭 1 丁目遺跡まで南北長で約 1000 m あまり集落遺跡が続いている状況である。尾張元興寺跡の東方には、ＪＲと名古屋鉄道の金山駅があり、この付近には古墳も検出されていて、さらにその南方には、古墳群をなす高蔵遺跡が位置している。

今回の調査地点は遺跡範囲の南西端にあたり、古代寺院の想定伽藍の範囲（調査地北に面して東西に続く「佐屋街道」あたりが南面の境界と目される（註 1）。）の外側にあたる。

註 1　服部哲也氏のご教示による。

図2　調査位置と周辺の主な調査地点

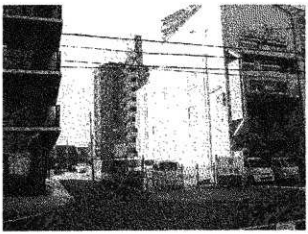


写真 1　遺跡付近の現況（北から）

写真 2　遺跡の全景（東から）

2　経過

当該土地について、名古屋市教育委員会事務局生涯学習部文化財保護室は、土地所有者である株式会社杉本組から同社が計画する事務所ビルの建設予定地が埋蔵文化財包蔵地（尾張元興寺跡）に該当することから、平成29年6月5日付同社からの「試掘調査依頼書」を受理した。これを受けて文化財保護室は、同年7月19日に試掘調査を行なった。3箇所の試掘坑を調査し、戦災によるとおもわれる家屋の瓦礫土坑もあるが、3箇所とも良好な遺物包含層の堆積や遺構の存在が想定された。

遺跡の残存する土地であることが判り、工事により遺跡に与える影響が大きいことから、事前の発掘調査について事業者である株式会社杉本組と文化財保護室が協議を行い、平成30年度後半に発掘調査を実施する業務を教育委員会に委託する運びとなった。そして、平成30年7月30日付で当該土地の「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」の契約を行なった。

以上の経過を経て、同年9月11日から、当該土地で直前まで使用していた駐車場のアスファルト舗装の除去および、表土層（近現代の撹乱土層）の除去（搬出）が事業者により行なわれた。

発掘調査作業は、9月20日からの準備工のあと、9月26日から小型のバックホウと作業員を投入して行なわれた。調査は、排土を場内積み置きする関係で南半区を先に調査し、終了後、10月12日から折り返し北半区の調査を行なった。10月26日には、北半区を終了し、北半部分も排土により調査区全体を敷き均しして発掘調査を終了した。

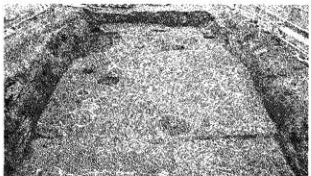


写真3　北半区の遺構検出状況（南から）

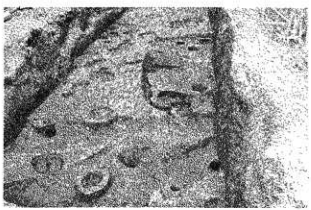


写真4　南半区検出の遺構群（南から）

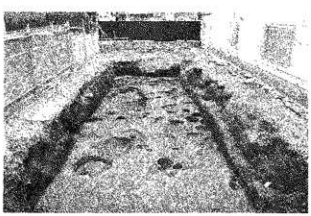


写真5　南半区全景（北から）

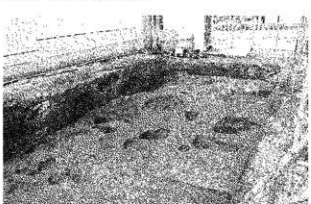


写真6　北半区全景（南東から）

3　調査の方法と成果

(1)　調査の方法

調査地は、アスファルト舗装の貸駐車場として調査直前まで使用されていた土地であるため、アスファルト撤去と表土層および近現代撹乱土の除去を教育委員会学芸員の立会のもと、事業者側が事前に行なった。

その後、発掘調査の作業に入るが、包含層は比較的厚く、場内に排土を積置く関係から、調査地南側から調査を始め（南半区）、終了後に折り返し北側（北半区）を調査した。

包含層中での遺構等の検出を行なうが、中近世以降のピット等は確認できるものの、想定される古代～古墳時代の遺構を検出することが上の色調での区別がつかないことから、地山（地盤層）まで下げた面で遺構を検出した。

調査の記録は、調査区内に基準杭を四箇所設置し、平面図は、平板実測による40分の1の平面図を作成し、土層断面図は20分の1で作成した（水糸レベルは、7.70ｍＴ．Ｐ）。

(2)　層序

調査地点に堆積している基本的な土層は、上から表土・撹乱土層が45cm、灰褐色砂質土層が10～20cm、黒褐色土層が30～40cmで以下地盤（地山）の熱田層（黄褐色～黄橙色土）である。

遺構は、主に地山面で検出され、それらの埋土は、暗褐色～黒褐色土を基本としている。

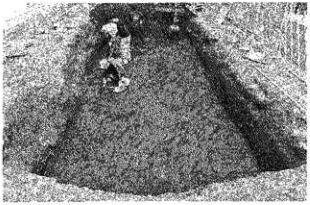


写真7　住居跡などの検出（南半区）

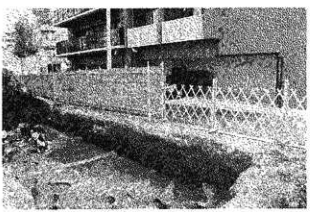


写真8　南半区東壁の土層

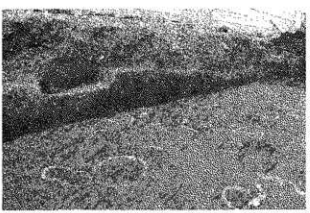


写真9　南半区西壁の土層

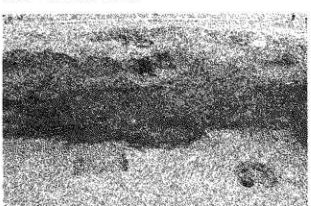


写真10　南半区東壁の土層

(3) 調査の成果

1) 遺構・遺物の概要

今回の発掘調査地点で検出された遺構のほとんどは、古墳時代の遺物包含層とおもわれる黒褐色土層中では検出が困難であったため、地山面まで下げた面での検出である。

主な検出遺構は、弥生時代と古墳時代の竪穴住居跡２軒（SB01、SB02）と、古墳時代の溝状遺構２条（SD01、SD02）、古墳時代の土師器小片が少量出土した土坑（SK01、02、03、08）、古代の瓦片等を含む土坑（SK04、05、06、07）があり、他に古墳時代や古代と想定される柱穴等のピットが検出された。

中世から近世の遺物、遺構はほとんど無かった。

出土遺物は、全体でコンテナケース４箱分の土師器片、須恵器片、古代瓦片が出土した。

古墳時代の遺物包含層中で出土した遺物は、のちに下位（地山面）で検出された遺構に伴うか明確ではない。

2) 遺構と遺物

● SB01

調査区（南半区）の東壁際の地山面で検出された隅丸方形の竪穴住居跡である。検出された遺構は、住居跡全体のうち北西隅部と西辺部分を含む範囲である。四辺はやや外側へ膨らむ形状であるとおもわれる。西辺部の長さは、約４.０ｍほどであるが、北辺、南辺の長さは不明であるため、規模や形状は不明である。

住居跡床部分の状況は、壁際に約１ｍの幅で、深さ 10cm 程度に地山を掘り込んだ後、貼り土（黄色地山ブロックと暗褐色土ブロックの混じり土）を行なった部分が検出された。この面を床面レベルとすると住居跡の中央部分のみ地山面が床となる。このような住居跡の類例は、北に隣接する遺跡の伊勢山中学校遺跡６次の SB05(4 世紀後半～５世紀前半)、同７次の SB04(５世紀後半～６世紀)があり、除湿の機能が考えられている。住居の壁溝や柱穴等は、この貼り土を掘り込んで作られているとおもわれる。

火処とおもわれる焼土の範囲等は検出範囲では、確認されなかった。

高坏、台付甕などの土器片が住居跡検出面以下の埋土から出土している（図６の１～６）。遺物の時期は２世紀頃とおもわれる。

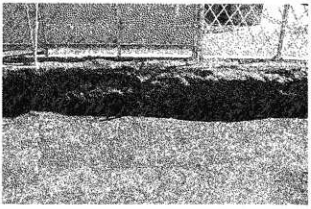


写真11　SB01検出状況（西から）

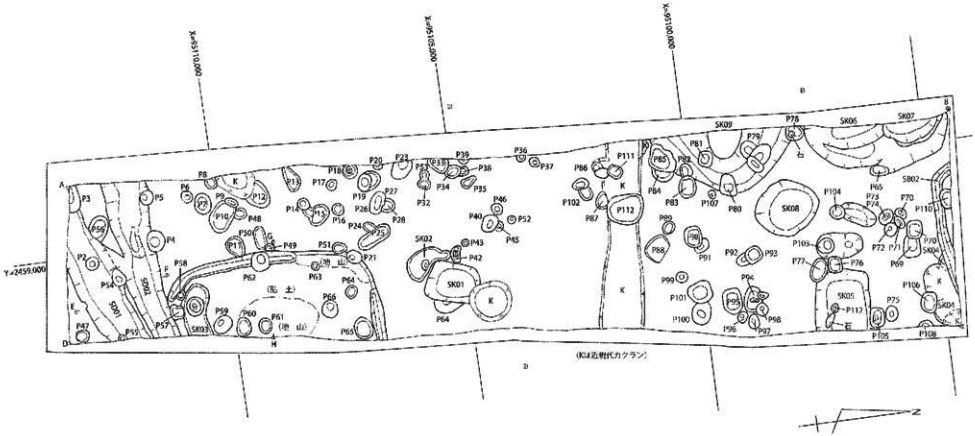
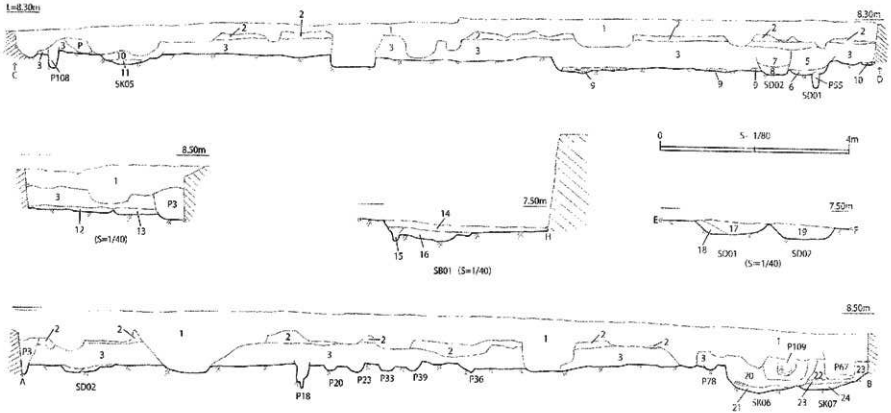


図3　調査区遺構位置図（S＝1/80）



1 表土・淺耕土
2 灰褐色砂質土、均質、締まり強い。
3 黒褐色土、均質、締まり弱い。
4 黒褐色土
5 黒褐色土、均質
6 黒褐色土、1～4cm 大の橙色地山ブロックを非常に多く含む。 } SD01
7 黒褐色土
8 黒褐色土、1～3cm 大の橙色地山ブロックを含む。 } SD02
9 黒褐色土と橙色地山のブロック土（SB01 床の貼土）
10 黒褐色土
11 黒褐色土、2～4cm 大の橙色地山ブロックを非常に多く含む。 } SK05
12 黒褐色土中に、7～8cm 大の地山ブロックを多く含む。締まり強い。
13 黒褐色土中に、1～3cm 大の地山ブロックを多く含む。締まり強い。（SD01）
14 黒褐色土、均質で粗く締まる。0.5cm 大の黄色土粒をわずかに含む。（SB01 埋土）
15 黒褐色土、黒幅強い。（SB01 壁溝）
16 黒褐色土中に、1～4cm 大の黄色地山ブロックを非常に多く含む。（SB01 貼土）
17 黒褐色土、1cm 大の黄色土粒をわずかに含む。
18 黒褐色土、1～3cm 大の黄色土ブロックを多く含む。周く締まる。 } SD01 埋土
19 黒褐色土、均質、固く締まる。（SD02 埋土）
20 黒褐色土、均質、固く締まる。
21 暗褐色土、0.5cm 大の黄色地山粒を少し含む } SK06
22 黒褐色土、均質
23 暗褐色土中に 1cm 大の地山ブロックを少し含む
24 暗褐色土中に 5～10cm 大の黄色地山ブロックを非常に多く含む。 } SK07

図4 調査区土層断面図（S＝1/80）

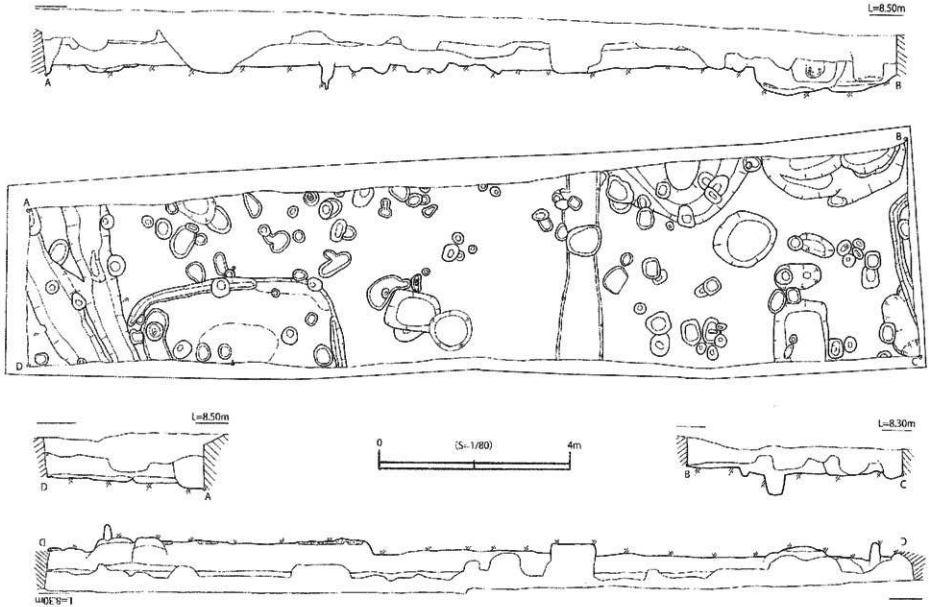


図5　調査区平面図、土層断面図（白図）S=1/80

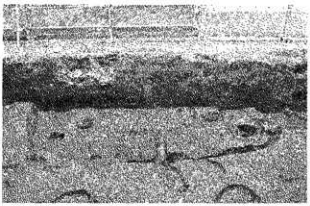


写真12　SB01壁に沿った貼土状況

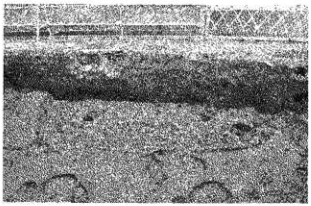


写真13　SB01貼土除去後の状態

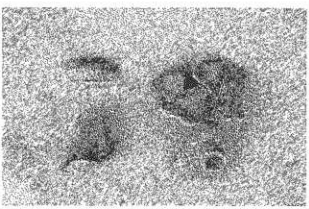


写真14　SB01出土遺物

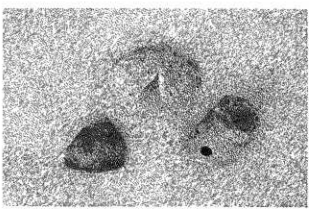


写真15　SB01出土遺物

● SB02

SB01から約12m離れた調査区（北半区）の北端部で、隅丸方形の竪穴住居跡の南西隅部とこれに続く南辺の一部を検出した。埋土は黒味の強い暗褐色土で均質である。壁溝は明瞭に作られている。住居に伴うとおもわれる柱穴が1基検出された。埋土から、赤彩の壺口部片が出土している。遺物の時期は、3世紀前半頃とおもわれる

写真16　SB02（壁溝と柱穴の検出）

写真17　SB02完掘状況

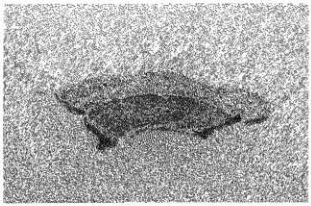


写真18　SB02出土遺物

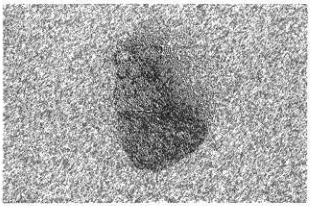


写真19　SB02出土遺物

● SD01

調査区（南半区）の南端部で、東西方向の溝状遺構の一部を地山面で検出した。幅は、確認できる部分で約 80 ～ 100cm、検出面からの深さは 10 ～ 20cm 前後である。横断面形は、浅いU字形である。

埋土からは、土師器小片がわずかに出土した。調査区東壁側での検出状況では、SD02 に切られている状況であり、SD02 が SD01 のあとに埋まっている。遺物の時期は 4 ～ 5 世紀頃とおもわれる。

● SD02

調査区（南半区）の南部で、SD01 埋土を切る状況で、東西方向の溝状遺構の一部を検出した。幅は 60 ～ 100cm で、検出面からの深さは 10 ～ 15cm 前後である。横断面形は、浅いU字形である。埋土から須恵器壺（甕）小片と土師器小片がわずかに出土した。遺物の時期は 4 ～ 5 世紀頃とおもわれる。

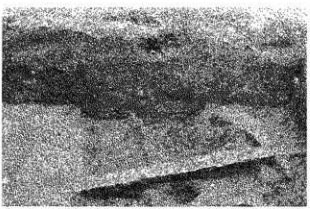


写真20　SD01（左）とSD02（右）

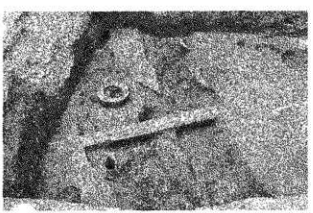


写真21　SD01（右）とSD02（左）

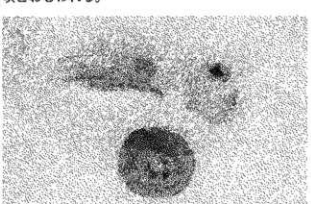


写真22　SD01出土遺物

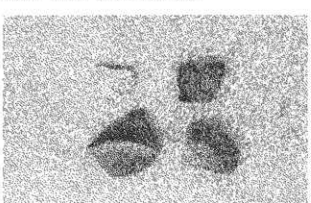


写真23　SD02出土遺物

● SK01

〈形状〉隅丸方形

〈長さ〉約110cm

〈 幅 〉約80cm

〈深さ〉約20cm

〈埋土〉暗褐色土

〈遺物の種類と時期〉須恵器片（5～6世紀か）、
上師器片、二枚貝

〈遺構の性格〉不明

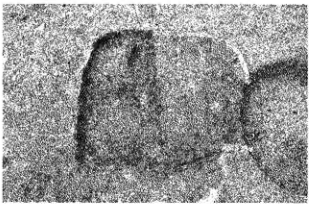


写真24　SK01（東から）

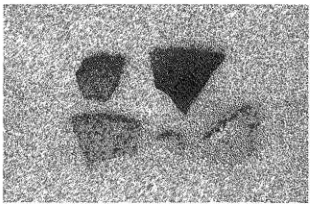


写真25　SK01出土遺物

● SK02

〈形状〉不整楕円形

〈長さ〉約90cm

〈 幅 〉約50cm

〈深さ〉約10cm

〈埋土〉暗褐色土

〈遺物の種類と時期〉出土遺物なし

〈遺構の性格〉不明

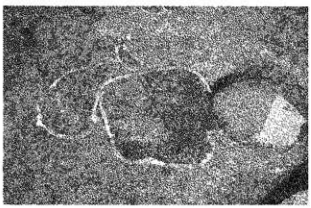


写真26　SK01（右）とSK02（左）（東から）

● SK03

〈形状〉不整楕円形

〈長さ〉110cm 以上

〈 幅 〉約 50cm

〈深さ〉約 7cm

〈埋土〉暗褐色土

〈遺物の種類と時期〉土師器片

〈遺構の性格〉SB01 内の施設とおもわれるが不明。

写真27　SK03（SB01手前隅部）

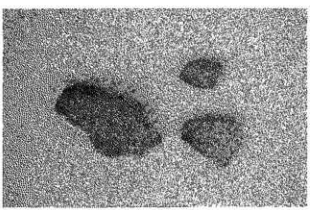


写真28　SK03出土遺物

● SK04

〈形状〉楕円形か

〈長さ〉140cm 以上（検出部分）

〈 幅 〉40cm（検出部分）

〈深さ〉約 12cm

〈埋土〉暗褐色土

〈遺物の種類と時期〉須恵器片（7～8世紀頃か）

〈遺構の性格〉不明

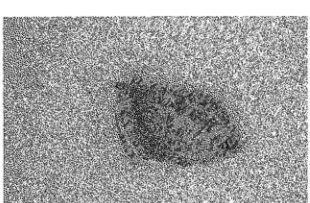


写真29　SK04出土遺物

● SK05

〈形状〉隅丸方形か

〈長さ〉130cm 以上（検出部分）

〈 幅 〉約 115cm（検出部分）

〈深さ〉約 20cm

〈埋土〉暗褐色土

〈遺物の種類と時期〉古代瓦片（8 世紀頃）、須恵器片、土師器片

〈遺構の性格〉不明

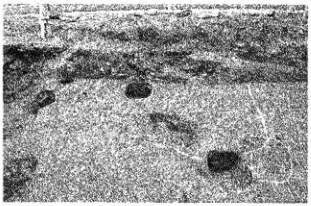


写真30　SK05検出状況（西から）

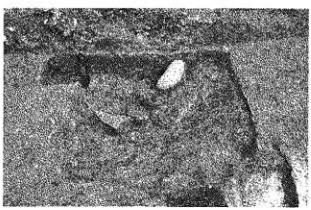


写真31　SK05瓦片等出土状況

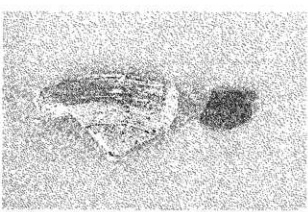


写真32　SK05出土遺物

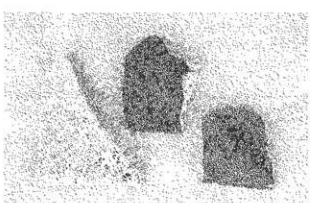


写真33　SK05出土遺物

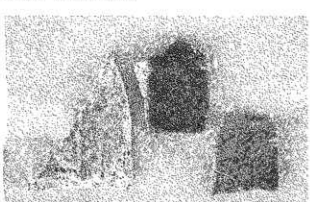


写真34　SK05出土遺物

● SK06

〈形状〉不整円形か

〈長さ〉約 180cm（検出部分）

〈 幅 〉約 90cm（検出部分）

〈深さ〉約 54cm

〈埋土〉暗褐色土

〈遺物の種類と時期〉古代瓦片（7～8 世紀）、須恵器片、土師器片

〈遺構の性格〉不明

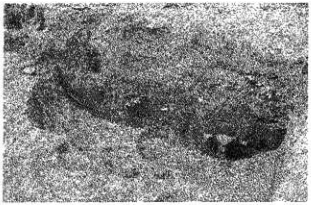


写真35　SK06(左)とSK07（右）

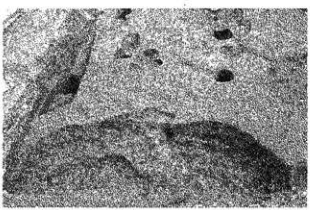


写真36　SK06(右)とSK07（左）

● SK07　〔写真は SK06 と共通〕

〈形状〉不明

〈長さ〉約 150cm（検出部分）

〈 幅 〉約 110cm（検出部分）

〈深さ〉約 54cm

〈埋土〉暗褐色土

〈遺物の種類と時期〉古代瓦片（7～8 世紀）、須恵器片（5～6 世紀）、土師器片

〈遺構の性格〉不明

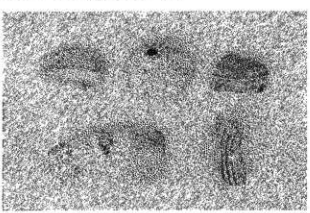


写真37　SK06・07出土遺物

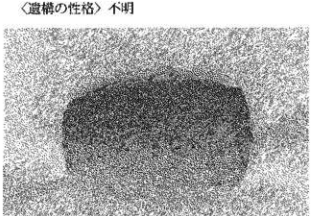


写真38　SK06・07出土遺物

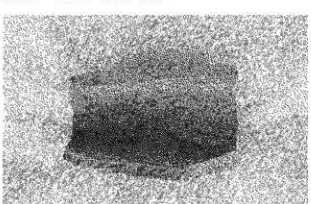


写真39　SK06・07出土遺物

● SK08

〈形状〉不整楕円形

〈長さ〉約 140cm（検出部分）

〈 幅 〉約 118cm（検出部分）

〈深さ〉約 20cm

〈埋土〉暗褐色土

〈遺物の種類と時期〉土師器片

〈遺構の性格〉不明

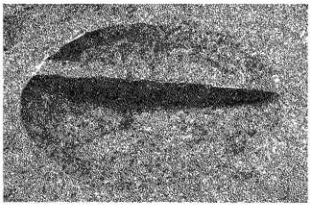


写真40　SK08（東から）

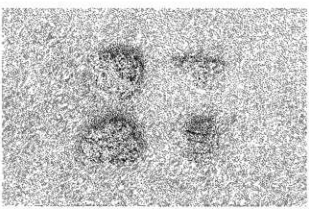


写真41　SK08出土遺物

● SK09

〈形状〉不明

〈長さ〉220cm 以上（検出部分）

〈 幅 〉150cm 以上（検出部分）

〈深さ〉約 9 cm

〈埋土〉暗褐色土

〈遺物の種類と時期〉土師器片

〈遺構の性格〉不明。竪穴住居跡の痕跡？

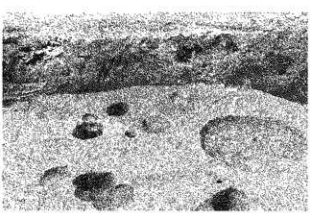


写真42　SK09（奥）とSK08（右）

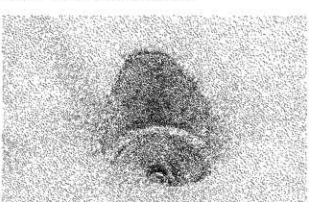


写真43　SK09出土遺物

● P109

〈形状〉不整円形か

〈長さ〉45cm 以上

〈 幅 〉 約 40cm

〈深さ〉約 60cm 以上

〈埋土〉暗茶褐色土

〈遺物の種類と時期〉瓦片　奈良～平安時代

〈遺構の性格〉掘立柱か

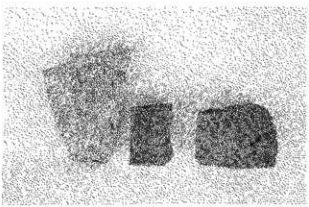


写真45　P109出土遺物

本文

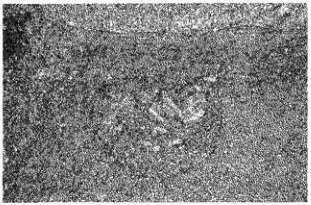


写真44　P109検出状況

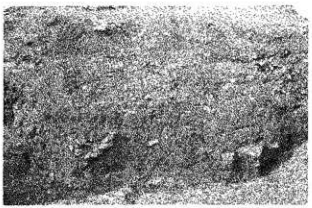


写真46　P109（左）とP67（右）

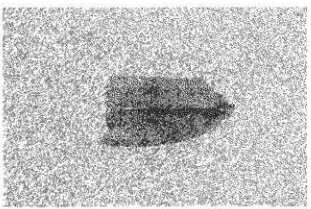


写真47　P33出土遺物

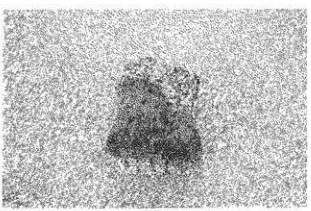


写真48　P112出土遺物

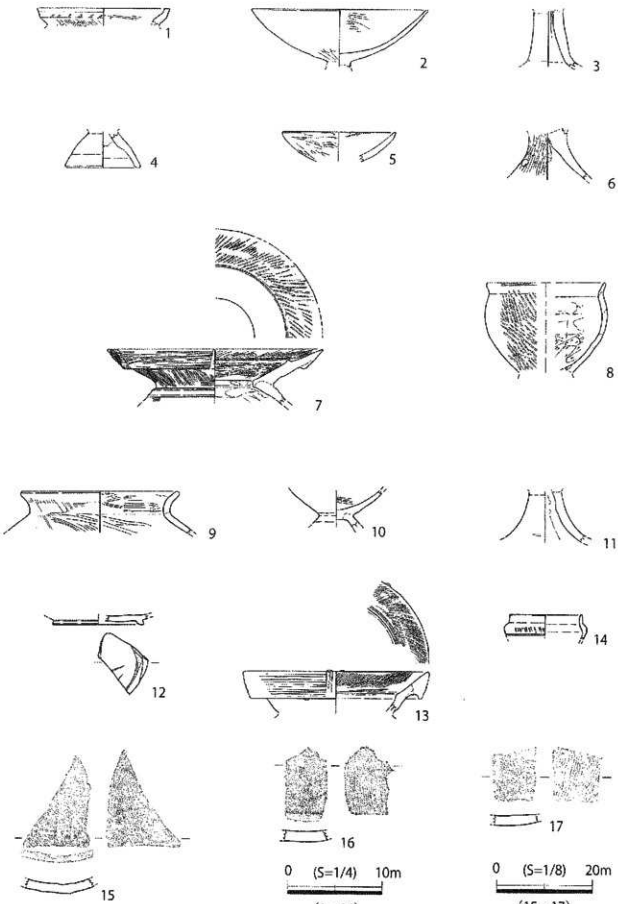


図6　出土遺物実測図（1）

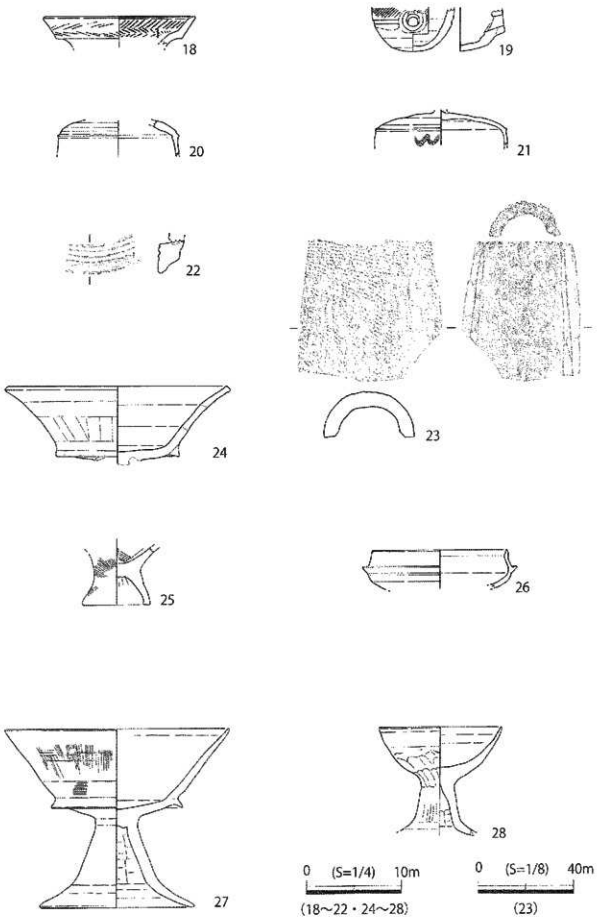


図7　出土遺物実測図（2）

表１　掲載遺物表

番号	種類	機種	出土位置	時期	特徴など
1	弥生土器	台付甕	SB01	廻間Ⅱ式（2世紀前葉）	口部片
2	弥生土器	高坏	SB01	廻間Ⅰ式か	坏部片
3	弥生土器	高坏	SB01	廻間Ⅰ式か	坏部片
4	弥生土器	台付甕	SB01	廻間Ⅰ式か	台部片
5	土師器？	器台（高坏）	SB01	廻間Ⅲ式（3世紀後半頃）か	坏部片
6	土師器？	高坏	SB01		脚部片
7	土師器	パレス壺	SB02	廻間Ⅱ式（2世紀前半頃）か	口部片内、外面に赤彩あり
8	土師器	台付甕	SB02	廻間Ⅱ式か	小型、裏部片。外面タタキ痕跡か
9	土師器	台付甕	SD01	松河戸式（4世紀頃）か	口部片
10	土師器	台付甕	SD01	宇田式頃（5世紀頃）	脚接合部片
11	土師器	高坏	SD01	廻間Ⅲ、Ⅳ式か	脚片
12	須恵器	坏	SK04	7～8世紀頃	底部片
13	土師器	パレス壺	SK05	廻間Ⅱ式か	口部片、内面に赤彩あり。
14	須恵器	短頸壺	SK05	7世紀頃	口部片
15	瓦	平瓦	SK05	8世紀頃	凸面縄タタキ
16	瓦	平瓦	SK05	8世紀頃	凸面平行タタキ
17	瓦	平瓦	SK05	8世紀頃	凸面平行タタキ
18	土師器	甕	SK05	廻間Ⅲ式	口部片
19	須恵器	壺	SK06	7世紀頃	底部片
20	須恵器	坏蓋	SK06	6世紀後半頃	
21	須恵器	蓋	SK06	5世紀後半頃	
22	瓦	軒丸瓦	SK06	7世紀後半頃	外縁部片（重圏縁）
23	瓦	丸瓦	SK06	8世紀頃	凸面格子タタキ
24	土師器	高坏	SK09上層	宇田Ⅰ式（5世紀前半頃）／坏部	
25	弥生土器	台付甕	P112	廻間Ⅰ式頃	台部片
26	須恵器	甕	P33	6世紀後半頃	
27	土師器	高坏	南半区包含層	宇田Ⅰ式	
28	土師器	高坏	南半区包含層	宇田Ⅰ式頃	

4　まとめ

今回の調査地点は、狭小で南北に細長い調査区であり遺跡範囲の南西端にあたるが、当遺跡を特徴付ける２つの注目される時代のうち、ひとつは古代寺院（願興寺）に伴う時期の遺構、遺物（７世紀後半～10世紀頃）、ふたつめは、古代寺院造営以前の弥生時代終末頃から古墳時代中頃にかけての遺構、遺物が検出された。

ひとつめの時代の成果では、結論的には当調査地点の南半区あたりで古代寺院に関わる遺構、遺物が検出されなくなるという状況を呈している（調査区北半のＳＫ０５、ＳＫ０６・07の位置までが、古代瓦片等を廃棄した遺構の分布範囲である）。このことはすぐ東側の16次調査地点の調査でも同様な成果が得られていて、調査区内では、区画するような溝状遺構やその他の遺構は確認されなかったものの、調査区のすぐ北面を東西に走る「佐屋街道」あたりが古代寺院の寺域？を画する境界ではないかとの服部哲也氏の指摘にほぼ合致するようである。「願興寺」の伽藍に関する遺構は、これまでほとんど検出されておらず、７次調査地点で塔の水煙が地山に突き刺さって出土し、この付近に塔の位置が想定されたくらいである。今後も調査地点の資料の積み重ねにより推定される根拠の補強材料の増加が期待される。

ふたつめの時代として、今回の調査では、古代寺院の造営以前の時代に関する資料が得られた。古墳時代の遺物包含層が調査区全体に広がっている状況が確認され、現在の遺跡範囲の南側にも遺跡は拡大（残存）しているとおもわれる。平成30年６月に当遺跡範囲の南側に新規登録した「新尾頭１丁目遺跡」と当遺跡（尾張元興寺跡）が接続（重複）する地点を今回調査したかたちになる。

今回の調査地点では、部分的ではあるが弥生時代終末期～古墳時代初頭頃の竪穴住居跡２軒が良好に検出された。当地点東側で行われた16次調査地点からも同様に古墳時代時代初頭頃から古墳時代中頃の竪穴住居跡（竪穴建物）が９軒（棟）検出されていて、北方に位置する正木町遺跡から当調査地点までの台地縁に沿った南北1,000ｍ以上にわたって古墳時代の集落遺跡群が続いていて、さらに南側へ続く状況であることは、おおいに注目されよう。

そして、古墳時代後期から７世紀中頃にかけては、当地域で最古の寺院が建立される下地が、地理的にも歴史的にもその条件を満たした場所であったと考えられ、寺院造営直前の遺跡の状況については、２次調査地点のSD01（幅約3m、深さ約2.4ｍで、７世紀中頃～後半の須恵器を含み、古代瓦片を含まないで埋まった大溝）のような三つめの時代の遺構は、今後も注目されよう。

《参考文献》
服部哲也ほか　1994　『尾張元興寺跡発掘調査報告』名古屋市文化財調査報告 28　名古屋市教育委員会
樋田康之　2017　『名古屋市熱田区　尾張元興寺跡第 16 次発掘調査報告書』　ナカシャクリエイテブ株式会社

報告書抄録

ふりがな	おわりがんごうじあとだい 18 じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	尾張元興寺遺跡第 18 次発掘調査報告書
編著者名	水野裕之
編集機関	名古屋市教育委員会　生涯学習部　文化財保護室
所在地	〒 460-8508　愛知県名古屋市中区三の丸三丁目 1 番 1 号　TEL052-972-3269　FAX052-972-4202
発行機関	名古屋市教育委員会　生涯学習部　文化財保護室
所在地	〒 460-8508　名古屋市中区三の丸三丁目 1 番 1 号　TEL052-972-3269　FAX052-972-4202
発行年月日	西暦 2019 年（平成 31 年）3 月 29 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おわりがんごうじあと 尾張元興寺跡	たごやしあつたく 名古屋市熱田区 しんあつたちょうっちょうめ 新尾頃一丁目 206 番	23100	7-226	35° 08′ 33″	1367° 532′ 51″	2018.9.20 ～ 2018.10.31	97 ㎡	事務所ビル

尾張元興寺跡第 18 次発掘調査報告書

2019（平成 31）年 3 月 25 日

発行　名古屋市教育委員会

印刷　マツモト印刷株式会社